

# 令和6年度 国語科実践・研究計画

部 員 ○鎌田 佳佑、工藤 優花、菅野 宣衛

研究テーマ  
**自覚的に言葉の力を働かせ、言葉とよりよく向き合う子どもを育む学び**

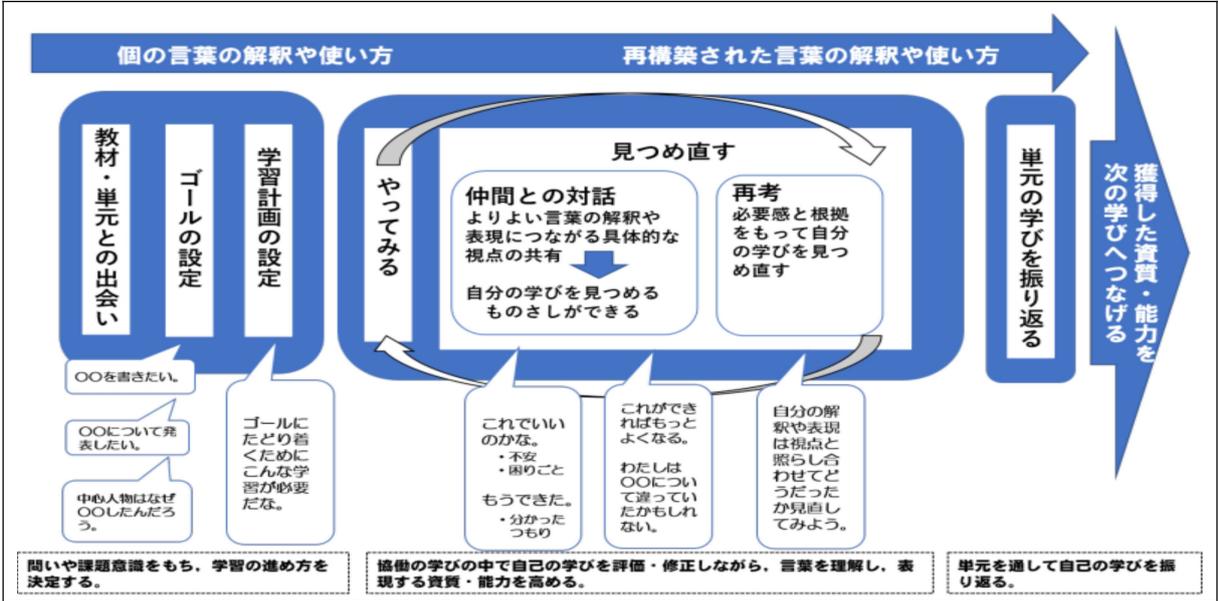
## 1 研究テーマについて

国語科の学習は、これまで何気なく使ってきた言葉を学習の対象として意識的に捉え直すことで、自らの「言葉の力」を更新することである。この「言葉の力」は、情報の獲得・発信や他者とのコミュニケーションなど、日々の生活の中で行われる様々な言語活動の基盤となる。

言葉の選び方、使い方一つで受け手の印象が変わる。言葉の解釈の幅が、対象の正しい理解や豊かな想像につながっていく。教材を越えて「言葉の力」と日常生活とのつながりが見えてくる。言葉を深く学び直す機会は、国語を学ぶ意義や楽しさの実感につながり、生涯に渡って言葉とよりよく向き合おうという気持ちを育むであろう。

昨年度の実践で、目的に応じてミニ・レッスンやホットシーティングを授業に位置付けることで、解釈や表現を見つめる「学びのものさし」を共有する場となったり、解釈や表現の選択肢を広げ、選択・決定をしたりする子どもの姿が見られた。一方で、より自律的に言葉と向き合う子どもの姿を引き出すためには、子ども自身が他者に働きかけたいとなるような、言葉に対する「問い」が生まれる活動の工夫を考へる必要性が見えてきた。個の学びと協働の学びを往還する中で「学びのものさし」を活かして言葉に関する「問い」と向き合い、言葉の使い方や解釈を更新していく子どもの姿を期待し、本テーマで実践を積み重ねていく。

- 国語科で目指す自律した子どもの姿
- ・ 根拠をもって自らの解釈や表現を吟味し、言葉を正確に理解してよりよく表現しようとする姿
  - ・ 言葉の効果や言葉に着目した学び方のよさを自覚し、単元を越えて活用する姿



図：国語科 自律した学習者を育てる学習のプロセス

## 2 研究の重点 (○は具体的な取組の例)

- よりよい解釈や表現を生み出す言葉に関する「問い」を、「学びのものさし」を活かして吟味する場の設定
- よりよい解釈や表現について、主体的に再検討する姿を引き出すために、解釈のずれや対立点、疑問を明らかにする。また、自らがどのような言葉の力を用いながら学習に臨んでいるのか自覚した上で、「学びのものさし」を活用できる活動の工夫をする。
  - 子どもの実態に応じて「自分の考えはどのように変わったのか」「なぜ、そう考えたのか」「学んだことは何か」という視点で、自分の言葉に関する選択・決定を振り返る場を設定する。